ロシア艦隊「イルティッシュ号」の江津沖沈没から100年

語り継がれる〝人類愛〟

日露戦争で世界に誇るロシア・バルチック艦隊の特務艦「イルティッシュ号」が一九〇五（明治三十八）年五月、日本軍の砲撃を受け、江津市和木町真島沖の日本海に沈没。地元住民は敵国にもかかわらず、次々と上陸するロシア兵たちを救助した。今年、百年目の節目となる人類愛あふれる史実を振り返る。

真島沖の海底51㍍に眠るイルティッシュ号の船体。金塊騒動もあった（1990年9月29日、シーワーク撮影、和木公民館所蔵）

金塊ロマン

ロシアの艦船が沈没した後、和木町に再び騒動が起きた。イ号が二百億円もの金塊を積んでいたうわさが広まり、多くの人たちにロマンをかき立てた。

昭和に入ると、イ号の

グラフ事務長が書いた「航海日記」が売り買いされ、何人もの県外資産家たちが水深五十一㍍の海底から金塊引き揚げを試みては断念した。

長い年月にはく大な資金と労力が注がれたが、結局、財宝は今も日の目を見ていない。

中学1年生㊨とほぼ同じ体格の少年兵が着ていた作業服に血痕が付着。左はヘルメット（和木公民館所蔵）

少年兵も乗船

イ号の乗組員の中には十二歳の少年兵も乗船していた。水の冷たさと恐怖で震えていた少年兵を浜にいた主婦が人肌で温めた逸話が今も残る。

イ号の学習で和木公民館を訪ねた同市の青陵中学校一年生男子は、少年兵が着用していた作業服などを実際、身にまとってみた。血が付着しているのに驚いた。こうした遺品は、同年代の子どもが戦争に駆り出されたことを生々しく伝え、戦争の悲惨さを語り掛ける。

イルティッシュ号が沈んだ日本海沖を見渡すように立つ慰霊碑＝江津市和木町

殉職者慰霊碑

ロシア水兵らが救助された江津市和木町の海岸にイ号の「殉職者慰霊碑」が建っている。イ号の引き揚げを試みた元日本船舶振興会長の故笹川良一氏が一九五九年に建立した。

ロシア兵士の墓があると勘違いして訪れる人もあるが、イ号の乗組員は同市では一人も亡くなっていない。地元では「日露戦争で亡くなったロシア兵の霊を慰めようとしたのでは」と推測する。

碑は、今もイ号が沈んだ日本海沖を見渡す丘で静かにたたずんでいる。

バルチック艦隊「イルティッシュ号」

◆船　体　全長180㍍、幅17㍍、排水量1万5000㌧、速度10・5㌔
◆積み荷　他の戦艦の弾薬筒、弾丸、機雷阻止装置800個、牛など

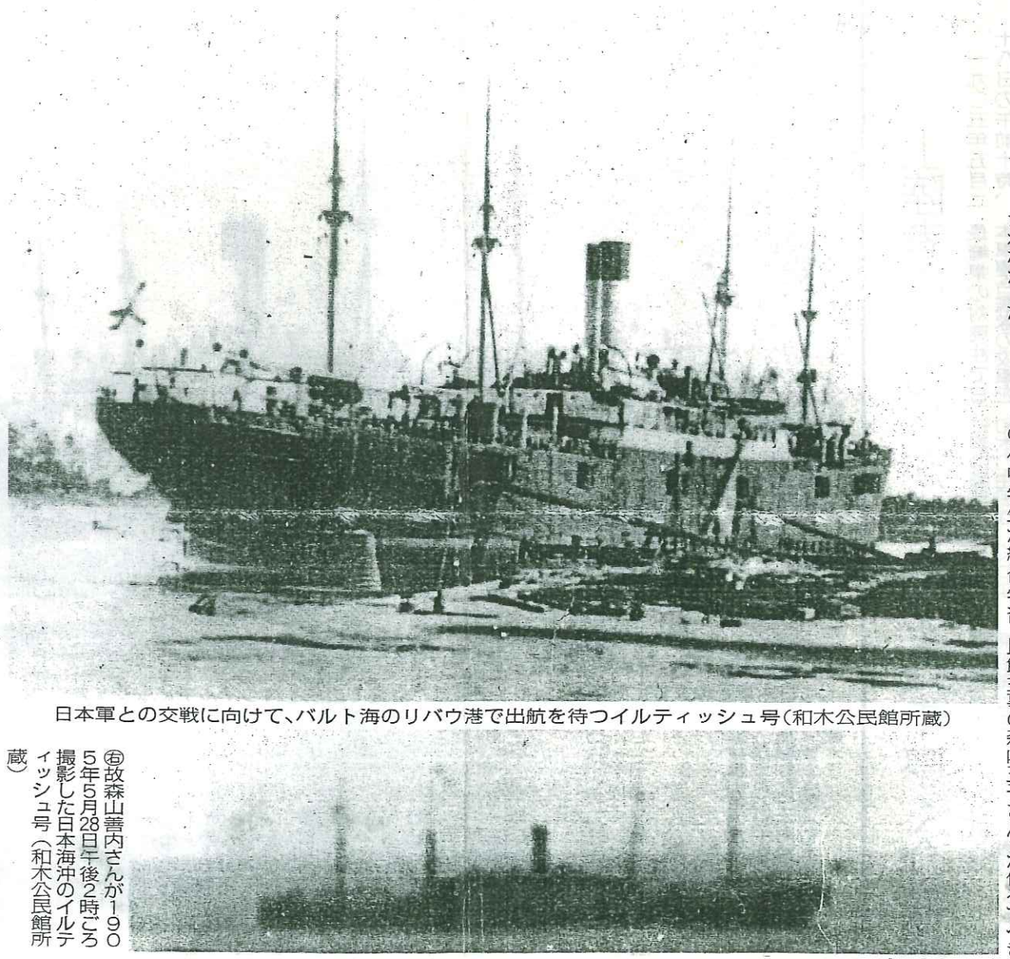
地元住民に今も脈々と

兵力でも財力でも日本に勝り、世界最強を誇ったバルチック艦隊は日本軍に敗れた。投降したロシアでは、コンスタンチン艦長をはじめイルティッシュ号の乗組員が日本人に助けられた史実などは封印され、歴史を刻む記録は残されなかった。

一方、江津市の和木公民館には生々しい遺品が残っており、市内の小中学生が総合学習などを通じて、戦争と平和について考える資料となっている。また、和木町の住民は勇気ある先人たちを誇りに思い、「ロシア祭り」を毎年開催し、人類愛を語り伝えている。

イ号の史実調査をライフワークにしている同公民館主事の森崎玉子さん(59)は「今の日本は平和ぼけしている。子どもたちが イ号に触れて、平和の尊さをかみしめてほしい」と強調。「イ号騒動の原点に返るべきだ」と訴える。

イルティッシュ号騒動から百年の時が流れた今、日本の大人や子どもが何をすべきなのか。遺品や海底に眠るイ号が大きな課題を投げ掛けている。



日本軍との交戦に向けて、バルト海のリバウ港で出航を待つイルティッシュ号（和木公民館所蔵）

㊨故森山善内さんが1905年5月28日午後2時ごろ撮影した日本海沖のイルティッシュ号（和木公民館所蔵）

上陸者のうちけが人も53人、手厚く介抱

救出劇

一九〇五年五月二十八日の午前十時、和木の浜で遊んでいた子どもたちの前に、霧の中から黒い船が姿を見せた。病院船かと見間違ったその船は前日の二十七日、長崎県の対馬沖で日本軍連合艦隊の攻撃を受け、航行不能となった対戦国ロシアの船だった。

白旗などを掲げてボートで上陸を始め、突然、姿を現した外国人に浜は騒然となった。和木の住民は、くわなどで抵抗しようとしたが、和木小学校の木島泰次郎教員が海に入って水兵を手招きすると、他の住民も外国人が乗ったボートをたぐり寄せた。

乗組員二百三十五人が上陸し終えたのは午後六時を回っていた。水は冷たく、浜では炊き出しの雑炊が用意されたが、口にする兵士はいなかったという。

上陸者のうち、けが人は五十三人。学校や民家に運ばれ、手厚い介抱を受けた。浜田で二十九日に取り調べを受けた後、船で佐世保に移送。ほとんどの乗組員は無事に母国に帰国した。

イ号は同日午後二時ごろ、真島沖約三・七㌔、水深五十一㍍地点に沈没。紺碧（こんぺき）の海底に今も静かに眠る。